『東方』二九二号より

日本側の史料を発掘した宋教仁研究

高綱 博文（日本大学）

近年、宋教仁（一八八二～一九一三）という人物については多くの研究者が関心を示すようになったが、片倉芳和氏が一九六〇年代末～七〇年代初頭に宋教仁研究を始めた頃は今日と状況がたいへん異なっていた。宋教仁についてのまとまった史料はほとんど存在せず、彼の日本亡命以前における状況についても具体的なことは判らなかった。一九八〇年代に入ってようやく変化が見え出し、陳旭麓編『宋教仁集』（中華書局、一九八一年）が刊行され、八七年には宋教仁生誕の地湖南省桃源県で「宋教仁生誕一〇五周年紀念学術討論会」が開催された。また、宋教仁は袁世凱の放った刺客の凶弾に倒れた悲運の政治家であるにも関わらず、辛亥革命史においてさほど重要視されてこなかったのは孫文を中心とした革命正統史観が長らく存在していたからである。

宋教仁は日本人にとっては北一輝の『支那革命外史』以来、孫文批判の先頭に立った人物として記憶され、日本人の孫文贔屓と相まって軽視されてきた。北は宋教仁を民族革命家にして議院内閣制を主張する近代的革命政治家と高く評価したのに対して、孫文の革命における指導の軽薄さと政治思想の思弁性を激しく指弾した。このような北の評価が顧みられるようになったのは、日本における中国近現代史研究が革命イデオロギーの呪縛を解かれ、清末民初のあらゆる党派と派閥を客観的に分析できるようになったからである。

クリックすると次の段にジャンプします。

片倉芳和著
『宋教仁研究――清末民初の政治と思想』
四六判・四三二頁・清流出版・五、二五〇円

周知の通り、宋教仁と孫文は革命方針をめぐって対立を繰り返し、宋教仁が全国統一に必要な北京と対峙する要地としては武昌しかないと考え、中部同盟会を結成して長江革命論を提唱したのに対して、孫文は広東を拠点とする辺境革命論に固執していた。一九一二年に中華民国が誕生すると清朝皇帝の退位と引き換えに実権は袁世凱が掌握するところとなり、革命派は彼をいかに牽制するかが課題となった。孫文には行政府に強い権限を与えるべきとの考えが強く、革命独裁の必要を唱えていたのに対して、宋教仁は行政府に巨大な権限を付与すればそれが腐敗した際にリスクが大きいと考え、議会にこそ優先権を与えるべきであるとした。袁世凱が実権を掌握する中で孫文の革命方略は非現実的であり、一方で宋教仁は議会に権力を与えて袁世凱を抑制するために議会政治の実現に向けて活動を開始し、反袁勢力を結集して国民党を結成し総選挙で圧勝し

た。宋教仁内閣の誕生は現実のものになりつつあった中で、一九一三年三月二〇日上海北駅で、宋教仁は志半ばにして袁世凱の刺客の凶弾に倒れた。

片倉氏は、宋教仁についての中国側史料が入手困難な状況の中で、さらにいまだ孫文革命正統史観が揺ぎ無い時代に研究を開始された。ここで私の先輩でもある片倉氏の研究経歴を紹介しておこう。

片倉氏は一九六九年に日本大学大学院修士課程に入学され、修士論文で宋教仁の滞日中の日記『我之歴史』を研究テーマとされてから今日に至るまで宋教仁一筋で研究されてきた。日記が書かれなくなってからの宋教仁の言動を調べるために霞ヶ関の外務省図書館で外務省保管記録を調査し、研究に従事した。最初の研究成果が「武昌起義と宋教仁」であり、辛亥革命における宋教仁の役割を日本側の史料で検証した実証研究としては初めてのものである。片倉氏は博士課程在学中にハーバード大学に留学された後、日本大学豊山女子中学校・高等学校に世界史の教員として奉職し、数年前からは日本大学鶴ヶ丘高等学校校長を務められた。本書に収録されているほとんどの論文は高校・中学校で教員を務めながら執筆したものである。片倉氏が教員生活をしながら宋教仁研究を継続できたのは、今年三月に解散した辛亥革命研究会の月例会、夏合宿、中国からの訪問研究者との交流、辛亥革命八〇周年・九〇周年のワークショップ、梅屋庄吉関係資料研究会などに参加してきたからであろう。片倉氏の宋教仁研究は、一九八七年に桃源県で開催された「宋教仁生誕一〇五周年紀念学術討論会」に招待されたことでハイライトを迎えたと言ってよい。宋教仁生誕地への訪問は片倉氏にとって長年の夢であり、そこで中国の宋教仁研究者と交流を深め、新たな宋教仁関係史料を入手し、宋教仁の親族らとも会うことができた。帰国して間もなく桃源県での討論会の状況を、私に興奮気味に話された片倉氏の様子を今でも忘れることができない。その時の成果は、本書の第一章「清末湖南の知識人と宋教仁」として掲載されている。

さて、本書の構成と内容は次の通りである。本書を構成する論文は初出のままであり、宋教仁の生涯に沿ってほぼ時代順に各論文が配されている。

第一章　清末湖南の知識人と宋教仁（一九九四年発表）
　一九〇四年長沙起義の失敗による日本亡命以前の宋教仁の人間形成と、彼とその革命派同志の関係から清末湖南の社会及び教育について検討している。
第二章　日本滞在中の宋教仁（一九七八年発表）
　一九〇四年～一〇年まで日本に滞在した宋教仁の行動について、彼の日記『我之歴史』と未公刊の日本外務省保管記録や宋教仁が在学した早稲田大学保管記録などによって検証している。
第三章　ある中国人革命家の滞日日記（一九八二年）
　宋教仁の日本滞在中の日記『我之歴史』により彼の日本における活動と生活の一端について紹介している。
第四章　武昌起義と宋教仁（一九七二年発表）
　宋教仁が一九一〇年一〇月に日本を離れてから一二年一月に中華民国臨時政府成立に至る辛亥革命期の彼の言動を主に日本外務省保管記録によって検証している。
第五章　張振武、方維銃殺事件について（一九七四年発表）
　一九一二年八月、武昌起義の指導者であった張振武と方維が袁世凱により銃殺された事件の経緯を検証し、この事件を契機として湖北省は袁世凱の勢力圏に組み込ま

トップページにもどる

れたことを明らかにしている。

第六章　季雨霖事件について（一九八五年発表）

一九一三年三月宋教仁が暗殺されると師団長季雨霖は袁世凱に反対して蜂起を準備したが、五月に黎元洪に弾圧された季雨霖事件が発生した。同事件の解明を通じて第二革命前夜における武漢の政治情勢の一端を明らかにしている。

第七章　陳其美――青幇から上海軍都督へ（一九九七年発表）

宋教仁の同盟者の一人である革命家陳其美について辛亥革命の際の上海蜂起を中心にその活動を描き、彼の上海軍政府都督就任の社会的背景を概述している。

第八章　宋教仁暗殺事件について（一九八一年発表）

一九一三年三月二〇日に発生した宋教仁暗殺事件を民初政争史の一環に位置付け考察したものである。同暗殺事件への孫文・黄興の対応も検討し第二革命における国民党敗北の要因についても検討している。

第九章　宋教仁の経済思想（一九九六年発表）

従来の研究ではほとんど取り上げてこなかった宋教仁の日本滞在中における革命運動のための経済工作と、袁世凱権力掌握下の唐紹儀内閣での農林総長としての経済政策を紹介している。

第十章　第二革命と革命派の日本亡命（一九八六年発表）

第二革命失敗後の孫文、黄興、李烈鈞の日本亡命の経緯を明らかにし、それを通して第二革命への日本の対中国政策を考察している。

宋教仁（一八八二～一九一三）年譜稿

付表　宋教仁研究史表

研究史　黄興研究学術討論会に出席して

トップページにもどる

史料紹介　ジョルダン公使とジョルダン文書

書評四本

片倉氏は、ご自身の言葉によれば「近代日中交渉史としてかねてから、明治末期に日本にやってきた辛亥革命の指導者宋教仁の生涯を研究」されてきた。片倉氏の歴史研究は、宋教仁評価が現代中国の政治変動の影響を受けて批判的なものから好意的なものまで一定しない中で、「述べて作らず」を基本スタンスとする実証的研究である。そして、片倉氏の宋教仁研究への最大の貢献は、宋教仁に関する日本側史料をほぼすべて独力で発掘したことである。片倉氏のこうした成果は国内外の研究者にも高く評価され、例えば『宋教仁の研究』（晃洋書房、二〇〇一年）をまとめられた松本英紀氏は「日本での片倉芳和氏の一連の研究は、新しい史料を発掘しながら日本滞在時期の宋教仁の動向を明らかにしたものとして貴重である」（同書九五頁）とし、片倉氏の成果を前提として宋教仁研究を進められたことが明記されている（同書二一七頁）。また、宋教仁が日本に滞在した六年間を日本側史料ではじめて検証した論文「日本滞在中の宋教仁」（本書第二章）は『辛亥革命史料叢刊』第三輯（中華書局、一九八一年）で中文翻訳され広く紹介された。

ところで、私の周りには片倉氏と同様にいろいろな事情で大学の教員にならずに高校や中学校などの教員生活をしながら中国近現代史研究を続けている多くの方々がいる。彼らは大学の教員と比べれば十分な研究時間をとることができず（最近の大学教員も大学改革等に翻弄されて研究時間の確保が難しくなっているが）、また研究費も自分で負担しながら困難な条件の中で研究している。片倉氏のよう

に一つのテーマにこだわり長い年月にわたりこつこつと史料を収集され、実証的研究を積み重ねるような篤学の士の存在は、日本における中国近現代史研究の一つの特性をなすものであろう。このようなタイプの研究者も多数参加してきた辛亥革命研究会の歴史に敬意を表し、その終焉を惜しむものである。

トップページにもどる